

## 漢時代の緡錢をめぐって

越 智 重 明

は し が き

漢時代の税のうちその性格さえも定かでないものに緡錢乃至緡錢を算する算緡錢がある。緡錢の理解としては、資産評価額あるいは評価資産を意味するといった平中荅次氏の説と、儲けた錢を意味するとする瓚（姓不明）や西田保氏の説とがその代表的なものであり、算緡錢の租税的性格については、財産税、所得税、商工税、商税、商業利得税、初めは商工業者に対する収益税であったが、のちには一般人民に対する財産税に変わったもの、といった見解<sup>1)</sup>が出されている。

筆者は緡錢は利益（を錢で示したもの）であり、算緡錢＝算緡は商賈や大小農民の商業活動による利益、工人が製造した品物を販売した際の利益にかける税のことと考える。本稿はそうした緡錢、算緡や、それに関連する若干の問題を商人<sup>あきど</sup>に視点をおいてとりあげる。

漢時代の緡錢をめぐって 越智

# 一 『史記』平準書の関係記事

繒錢に関する基本的史料は、『史記』平準書の公卿の上言（以下、「上言」という）に見える。本節はまず「上言」をかかげ、あわせて若干の点にふれる。

「平準書」に、

（前略）商賈以幣之<sup>(a)</sup> 変多、積貨逐利。於是公卿言、

郡国頗被菑害<sup>(b)</sup>。貧民無產業者、募徙広饒之地。陛下損膳省用、出禁錢以振元元<sup>(c)</sup>。寬貸賦、而民不斉出於南畝。

商賈滋衆。貧者畜積無有、皆仰県官。

(A) 異時算輶車。賈人繒錢、皆有差。請算如故。

(B) 諸賈人末作、貰貸売（売は『漢書』食貨志下によつて補う）買居邑稽（稽は『漢書』食貨志下では貯積となっている）諸物、及商以取利者、雖無市籍、各以其物自占、率繒錢二千而一算。

(C) 諸作有租及鑄、率繒錢四千一算。

(D) 非吏比者、三老、北辺騎士、輶車以一算。商賈人輶車二算。船五丈以上一算。

(E) 匿不自占、占不悉、戍辺一歳、没入繒錢。有能告者、以其半畀之。

(F) 賈人有市籍者、及其家屬、皆無得籍名田、以便農。敢犯令、没入田僮。

と記している。(a)はさきに皮幣・白金（三銖錢）をつくつたが、商賈は貨幣政策の変動の大きいのに乗じて多大の

利益をえている。よって彼らを弾圧しその錢を吸収すべきである、といった意味合いをもつものである。(c)は「平準書」に、

天子為伐胡盛養馬。馬之來食長安者數萬匹。卒牽掌者、關中不足。乃調傍近郡。而胡降者皆衣食縣官。縣官不給。天子乃損膳、解乘輿駟、出御府禁藏、以贍之。

とあるのをふまえているものであり、(b)は、これに続いて、

其明年<sup>(元狩三年をいう)</sup>山東被水菑、民多飢乏。於是天子遣使者、虛郡國倉廩、以振貧民。猶不足。又募豪富人相貸假。尚不能救。乃徙貧民於關以西、及充朔方以南新秦中、七十餘萬口。衣食皆仰給縣官數歲、假予產業、使者分部護之、冠蓋相望。其費以億計、不可勝數。

とあるのをふまえているものである。この「上言」のなされた時期についてであるが、「上言」は元狩四年(西紀前一一九年)になされ、その上言がそのまま実施されたと理解されている(少くともそうした見解が一般的である)と思われる。それは恐らく「平準書」に、

天子既下緡錢令。

とあり、『漢書』<sup>六卷</sup>武帝紀元狩四年冬の条に、

初算緡錢。

とあるが、先の緡錢令を下したのを、後の初めて緡錢を算したのと同じ内容とし、両者を関連づけてのことであろう。こうした推断に問題はなからう(のちにふれるように、(d)は実行されていない)。もっとも、(c)の「諸作有租及鑄」

は、第二節で述べるように、正しくは（工業製品の）製造業者が塩を煮、鉄器を鑄、それを占租（申告）したときのことを指しているとすべきである。そうすると「上言」は元狩四年にそれが実行に移されたにしても、同年の塩鉄専売の施行より前で、かつてその「上言」の時点にあっても塩鉄の占租が行われるべきであったのを前提としている、ということになる。

ところで、右の「初」というのは、歴史上始めて、といった意味ではない。こうした初の用法は、その内容に（新らしく）ある特色をもつものが、いままでのものに代って施行されるとき用いられるものである。具体的にいうと、(A)の異時、買人の場合、繒銭の算の割合が他より高かったが、それがのち他と同じになった。「上言」の(B)は買人の割合を故のように高くし、あわせて商人の繒銭の算をそれと同じようにしたいと考えて、そうした（いままでと違った）内容をもつものを新たに施行したいといっているのである。この異時については諸説あるが、いつも断定できない。今のところ高帝のときよりもあとのある時期、としかいえない。なお、この差というのは、(C)の工人の場合との差であろう。ところで、(D)に商賈が出ているが、それらは專業として商業活動をしているものとすべきである。そのほかにも兼業として商業活動をしているものがある。それらの一端はのちにふれるが、(B)は新たにそうしたもののへの繒銭の算の割合をも專業商人としての商賈と同じにすることを含めているのであろう（一算は、旧來說かれているように、漢律の人頭税の一算同様、一二〇銭としてよからう）。なお、武帝のとき(D)の買人が私田所有を禁止されたことはない。そうしたことの生ずるのは早くても前漢末王莽が国政を握ったときのことであらう。<sup>(2)</sup>

## 二 繙銭と占租

繙銭については、平中氏の、繙銭は資産評価額あるいは評価資産を意味するという説が出されている。また、吉田虎雄氏の、算繙銭は初めは商工業者の商品や製品に対して課せられた収益税であったが、後には商工業者以外の一般人の財物に対してもこれが課せられることになり、事実上財産税に転化した。瓚の説（後引）は初めの頃の算繙銭についていい、張守節（唐）が『史記』<sup>卷一百三十三</sup>張湯伝の注に引く『正義』に算繙銭のことを説明して、

武帝征伐四夷、国用不足。故税民田宅船乘畜產奴婢、皆平作銭数、每千銭一算出一等。賈人倍之。

と述べているのは後の頃のものについていったものであらう、とする説があり、つとに中国で出された商賈の貨物の資本価額を指すという説もある。さて、平中氏は、

なお「繙銭」については、西田保氏が「漢の中家の産に就いて」（加藤博士還暦記念東洋史集説所収）という論文の中で一つの新しい解釈を提示しておられる。西田氏は、前述の漢書武帝紀元狩四年の「初算繙銭」の注および史記平準書の「率繙銭二千而一算」の集解に引くところの瓚の説に、

此繙銭、為是儲繙銭也、故随其用所施、施於利重者、其算亦多。

とあることを挙げて、之によれば此に云う「繙銭」は「儲けた銭」の意であると述べ、従って「算繙」とは商賈の利潤に課した利得税であると判断しておられるのである。

しかし、このような解釈は誤りである。瓚の云うところの「儲繙銭」の「儲」の字は氏が云われるような

「もうける」という意味ではなくて「たくわえる」意味であり、「儲」は「貯」と同義であった。それゆえに、氏が「繒銭」を「儲けた銭」と解し、「算繒銭」を商業利得税のように判断されたのは妥当でない。瓚が「此繒銭、為是儲繒銭也。」と述べたのは、「此に云う『繒銭』とは、商賈が其の營業のために貯積している繒銭のことである。」と説明しているもので、それは現銭の貯積を指して「繒銭」といったものように受けとられ易いが、実は商賈の貨物として貯積されている投下資本のことを意味したのである。そのことは、前述の史記平準書の「楊可の告繒」の条の集解に引く瓚の説に、

商賈の居積、および伎巧の家の桑農にあらずして生出するところのもの、之を「繒」と謂う。

と説き、商賈の蓄積する貨物および工匠の製品を「繒」と云うのだと説明していることによっても知られる。と記しておられる。<sup>(4)</sup>これは現在最も有力な説といえようが、「上言」だけについて見た際妥当な見解のように受けとれる。しかし、他史料をあわせ見た際、「上言」の関係記事（瓚の説）をも通して解釈できる別の見解が生ずる。以下それを取りあげる。（西田氏の繒銭の理解は私見と合致するが、その論述は右に見える程度の簡単なものである。）

まず占についてであるが、『漢書』<sup>卷五十一</sup>王子侯表に、旁光侯殷について、

元鼎元年（西紀前一二六年）坐貸子錢、不占租取息、過律。会赦、免。

とある。この——（傍線）の部分は、子錢（利息をうむ錢）を貸したが、その取った利息（つまり利益）を占租（税の申告）しなかった。それは律にたがったことであるが、それに坐した、といった意味となろう。なお、この記事については、顔師古の注に、

師古曰、以子錢出貸、律合收租、匿不占。取利又多也。

とある。これは子錢を貸したので、律によって（貸した者が）利益を申告し、（政府が）それに応じて税を収めるべきであるが、（貸したものが）利益を申告しなかった。そこでは脱税が行われ利益を不当に多くえている、といった内容となる。また、『漢書』<sup>卷下</sup>王子侯表下に、陵郷侯訢について、

又貸穀息、過律、免。

とある。ここには「不占租」といった類の表現が出ていないが、穀を貸して利息をとったが、その利益を占租せず、あるいは正確な占租をせず、律にたがったので免ぜられた、と読むべきことになる。

ここで『漢書』<sup>七卷</sup>昭帝紀、始元六年（西紀前八一年）七月の条を見ると、

罷權酷官、令民得以律占租賣酒升四錢。

とあるが、その顔師古の注に、

如淳曰、律、諸当占租者、家長身各以其物占。占不以実、家長不身自書、皆罰金二斤。没入所不自占物及買錢  
県官。

とある。ここに見える漢律の占と占租とは同一内容とすべきである。右文は塩鉄論争の結果として酒の専売制をやめたことを示しているものであるが、そこに、民に律によって利益を占租する形で酒を売することを許し、その際、升ごとに四錢の割合で利益の一部を納めさせた、ということが見える。なお、「没入所不自占物及買錢県官」は占租しなかったとき、買受け人の手に渡っている品物と買錢（売りの上金）とを県官に没収する、という意味とな

る。この占<sub>二</sub>占租とさきの占租とは同じ内容である。

右の考察結果を頭において(B)を読むと、それは諸の買人で末作（この際は商い）をして、（店舗のある）居住している邑で諸の商品をたくわえ、かけうりをしたり売買をしたもの、と商人で利をえたものとは、（前者は市籍に付けられ）後者の場合必らずしも市籍に付けられていないが、何れもそのもうけた物を自ら申告して、繒錢二千錢につき一算の割合いで税を出させる、といった内容となる。この物は、さきに見た漢律の「物及賣錢」を簡稱したものとすることもできようが、むしろ、ものの数量といった意味とされよう。こうした形の物の用法の一例をあげると、『国語』周語上に、「神之見也、不過其物。」とあり、その韋昭注に、「物、物数也。」とあるが、この物がそれにはば該当する。かくて瓚の繒錢の「儲」は西田氏のいわれるようにもうける、といった意味となる。また、楊可の告繒の条に引くものの原文は、

瓚曰、商賈居積、及伎巧之家、非桑農、所生出、謂之繒。茂陵中書、有繒田奴婢、是也。

である。この——（傍線）の部分は、いままで見てきたところから、商賈で利益として集積している錢物と、工人の家で農桑関係を除き、物品生産によってうみ出した利益とを繒<sub>二</sub>繒錢というといった意味となる（この利益は錢で計られる）。「非桑農」とあるのは、農民用の農具（鋤など）を免税にしたことを察せしめる。蓋し政府に免税分だけ安く農具を供給させようとする意図があったのであらう（この措置は塩鉄専売より前の時期のものとなる。しかし、『塩鉄論』水旱<sub>第三十六</sub>に見える、塩鉄専売より前に煮鉄の占租が行われたときの状態とそれとが重なるのかどうかはわからない）。さて、田租は田の収穫を勘案してその所有者にかけるものであり、それだけに収穫が極度に少なかつたり無かつたりした場



合には免ぜられることがあるが、その収穫の相当部分は収益となる。それだけにそれは収益に対しかける税という基本的性格では繒銭と同質である。しかしその収穫（正確にはその収益）が繒銭とされたことはない。

ところで、『塩鉄論』水旱第三十六には、塩鉄専売より前の時期のこととして、

賢良曰、……故民得占租鼓鑄煮塩之時、塩与五穀同賈、器利而中用。

とある。ここでは民が煮塩鼓鉄について占租すべきであつたのが示されている。つまり、塩鉄専売より前の時期において、塩鉄業者が煮塩鼓鉄<sup>①</sup>煮鉄の利益を占<sup>②</sup>占租すべきであつたのがわかる。このように見てくると、(C)の「有租及鑄」は「占租煮鑄」の誤りということになろう。

ところで、『漢書』<sup>卷三十</sup>食貨志下に、

元帝時、貢禹言、宜罷采珠玉金銀鑄錢之官、毋復以為幣、除其販売、租銖之律。

とある。『漢書』<sup>卷七</sup>貢禹伝には、——（傍線）の部分か、

市井勿得販売、除其租銖之律。

となっている。「食貨志」の貢禹の言は、「貢禹伝」のそれを要約したものであるから、いま後者によって考えてみよう。すでに別稿で述べたように、漢時代の文章には、「(x)、(y)、(y)、(x)」と続くものにあつて、(x)が(x)にかかり、(y)が(y)にかかることがある。<sup>(5)</sup>この「貢禹伝」の文章もそうした観点からとりあげるべきものであつて、(x)、(x)にあたるものとして、

宜罷采珠玉金銀、市井勿得販売。

が考えられ、(y)、(y')にあたるものとして、

宜罷鑄錢之官、毋復以為幣。

が考えられる。「除其租銖之律。」はこの両者にかかるもので、前者については「除其租之律。」がかり、後者については「除其銖（錢又は鑄の誤り）之律。」<sup>(6)</sup>がかかる。このように見てくると、前者にかかる租は自ら占租のこととなる。こうした租Ⅱ占租は(B)の租（占租）と同質となる。

さて、『史記』<sup>卷五十二</sup>齊悼惠王世家に、

因言齊臨菑十萬戶、市租千金。

とあり、その『索隱』に、

市租、謂所売之物出稅。日得千金。言齊人衆而且富也。

とあり、『正義』に、

謂臨菑之市、所売之物、日出稅。利千金。言齊人之殷富也。千金、萬貫也。

とあるが、市租は商取引にあたり売る者が出す税である。これは当然利益（繒錢）に応じたものとなろう。右は齊國の臨菑の市における市租であるが、これと同じ市租が漢王朝の直轄地の市においてもとられていたとして大過あるまい。<sup>(7)</sup>

また、『漢書』貢禹伝の元帝のときの貢禹の上言に、

自五銖錢起已來、七十余年。民坐盜鑄錢、被刑者衆。富人積錢萬室、猶亡厭足。民心動搖。商賈求利東西南

北、各用智巧。好衣美食、歲有十二之利。而不出租稅。農夫父子暴露中野、不避寒暑。掉山杞土、手足胼胝。

已奉穀租。又出稟稅。鄉部私求、不可勝供。故民弃本逐末、耕者不能半。貧民雖賜之田、猶賤売以買。窮則起為盜賊。何者末利深而惑於錢也。是以姦邪不可禁、其原皆起於錢也。疾其末者、絕其本。（下略）

とある。顏師古の注に、「師古曰、若有万錢為買、則獲二千之利。」とあるが、ここでは商賈が歲ごとに、元金十に對し利益二があるにもかかわらず、租税を出さないとしている。この際の租税は田租の類ではなく、その利益に對する税（算繒錢）のことである。また、「鄉部私求、不可勝供」とあるのは、顏師古の注に、「師古曰、言鄉部之吏、又私有所求、不能供之。」とあるような意味であろう。要するに、ここに商賈が租税を出さないとあるのは、商賈は十二の利益をえて好衣美食をしているにもかかわらず、脱税をして十分に算繒を支払っていない。一方、農夫は懸命に努力して田租、稟税を出す。しかもその上に郷吏の私的要求があるが、それに供しきれない、といった状態にある。こうした不条理があるので農民が農業を捨てて商売をするようになる、といった趣旨に出ているものがある。

また、「平準書」に、元鼎四〜五年（西紀前一三〜一二年）のこととして、

令民得畜牧辺郡、官仮馬母、三歳而帰、及息什一、以除告繒、用充勿新秦中。

とある。この「告繒」は版本によっては「占繒」につくられている。<sup>(8)</sup>これが正しいと考えられるので、以下それによって論を進める（告繒についてはのちに述べるが、この際はそれに該当しない）。これは民に辺郡で牧畜することを許し、その際、官から種馬をかし、満三年になるとそれを官に返させ、利息として牧馬一〇頭につき子馬一頭をとつ

た。その利息をとったので、緡錢を申告することを除いた。それらは新秦中に充切した。といった内容のものである。なお、『集解』には、「李奇曰、……及有蕃息、与<sup>タメ</sup>当出緡算者、皆復、令居新秦中、又充切之也。」とある。こうしたことは、緡錢（を算すること）がもとからえた利益（を算する）ものであるのを察せしめるものである。

### 三 告緡と王莽の税法

本節は前節の考察を若干の点で補足する。

第一に、(B)、(D)に関する(四)の告緡についてであるが、「平準書」に、

天子既下緡錢令、而尊卜式。百姓終莫分財佐<sup>タメ</sup>官。於是楊可告緡錢縱矣。

とある。卜式は家産を差出して国家の入費を助けようとしたが、天子（武帝）は他の者にそれを見ならわせようとした。しかし、その効果がなかったので、告緡を縦にさせた。右はそれをいつているものである。ところで、『考証』に、

錢大昕曰、漢志、無楊可二字。索隱於此処無注。至下文楊可告緡徧天下、始云、楊姓、可名也。則此処本無楊可二字明矣。

とあるが、さきの「楊可」の二字は削るべきであろう。そうすると、この告緡（錢）は一応公卿の「上言」の(四)の通りのものであったと推測できよう。

さて、「平準書」には、また、

卜式相齊。而楊可告緡徧天下。中家以上、大抵皆遇告。杜周治之、獄少反者。乃分遣御史廷尉正監、分曹往、即治郡國緡錢。得民財物、以億計。奴婢以千萬數、田、大畧數百頃、小畧百余頃。宅亦如之。於是商賈中家以上、大率破。民偷甘食好衣、不事畜藏之產業。而梟官有塩鉄緡錢之故、用益饒矣。

とある。「卜式相齊」については、『考証』に、

岡白駒曰、卜式相齊一語、於文前後不相蒙。而大意自聯貫。愚按、卜式相齊、不在京師。無復言聚斂之害者、前後呼応。是史公文章之妙。

と見えるが、何れにしても告緡は卜式が齊に相となったとき以後行われたものであらう。なお、元狩六年（西紀前一二七年）、皇子闕を封じて齊王となしたが、卜式がその太傅となつてゐる。齊に相となつたのは蓋しそれ以後のことであらう。つまり、それは「上言」よりのちのことと考えられるのである。ところで、「上言」の(四)は自占しなかつたり自占しても不正確であつた場合、緡錢を没入し、本人を一年間戍邊させるものであつて、それによつて田宅や奴婢を没入するといつたことはない。しかし、右の緡錢の不正によつて没されたものには商賈(など)の多くの田宅、奴婢がある。けれどもそこに一年間の戍邊を考えがたい。前者に田宅、奴婢の没入をあわせ考えることも全く不可能ではないが、後者に戍邊が同時にあつたとは想定しがたいと思われる。このように見てくると、公卿の「上言」の緡錢の申告の不正とこの緡錢の申告の不正とは処罰内容に大きい違いがあることになる。これについては、「上言」のような形のものが行われなかつたか、それとも一旦実行された「上言」の内容が變化して右のようになつたかの何れかとなる。この際、告緡についてさきに楊可の名がなく、のちにそれが登場したとすると、ま

ず(四)のようなことが生じ、ついであのようなことが生じたとするのも十分可能性をもつであらう。

ところで、『漢書』武帝紀、元鼎三年(西紀前一一四年)十一月の条に、

令民告緡者、以其半与之。

とあり、『漢書』卷二五五行志中之に、

元鼎三年三月、水冰、四月雨<sup>フラス</sup>雪。關東十余郡、人相食。是歲、民不占緡錢。有告者、以半界之。

とある。これについて平中氏はつぎのように述べておられる。

(前略)その後、武帝の元鼎三年十一月にも告緡のことがあり、武帝紀に、

十一月、令して、民の告緡する者には、其の半ばを以て之に与う。

と記している。王先謙は元鼎三年の告緡令をこのとき初めて此の令が出たものと誤認し、食貨志の元狩四年の告緡の条にわざわざ注を加えて、

武紀には、「元鼎三年、令して、民の告緡する者には、其の半ばを以て之に与う。」とあり。すでに算緡錢に後れること六年なり。考うに、此れ、文をつづりて省并するの故か。

と述べているが、彼が告緡令を元鼎三年に初まるものと考え、食貨志の元狩四年の条に之を載せているのは便宜これを并記したものに過ぎないと認めているのは誤りである。そのことに就いては、宋の呂祖謙の大事記解題卷一二に元鼎三年の告緡令を説明して次の通り述べている。

元狩四年、告緡の令を下し、すでに、「能く告げるものあらば、其の半ばを以て之にあたう。」と曰えり。楊

可が繒を告げしめ義縦が可の為に使いするものを捕えしは、蓋し半ばをあたえるの賞ありと雖も、しかも告げる者猶少く、ゆえに可が使を遣わして以て之を督したるなり。今年（元鼎三年）またかさねて旧令を嚴にして、以て之を促すなり。

右の呂祖謙の説明によつて、元狩四年の告繒令と元狩六年および元鼎三年の告繒との関係は極めて明白である。この元鼎三年の告繒がどのような情況の下で行われたかについては、漢書卷二十七の五行志（中之下）に次のように記している。

元鼎三年、三月に水冰り、四月に雪ふる。関東の十余の郡にては人相い食む。是の歳、民、繒錢を占せず。告げる者あれば、半ば以て之にあたう。

ところが、司馬光の資治通鑑卷二〇には此の年の告繒のことを全く載せていないのみならず、元狩六年冬十月の「楊可、繒錢を告げしめること縦まななり。」の条の考異に、

漢書武紀には「元鼎三年十一月、民をして繒を告げしむ。」とあるも、義縦伝に拠れば則ち今冬にあり。

と述べて、武帝紀元鼎三年の記事を誤載であるかの如く扱っているが、これは失当である。<sup>(9)</sup>

ここで私見を述べてみよう。元鼎三年十一月の半ばを与えるというのもさきの告繒のときと同様、無申告・不正申告の繒錢額の二分の一を与えるということであろう。ところで、右の「五行志」の記述は正常でない降雪などがあったのと、人間社会に変事が生じたのとの相関関係を示すものであるが、いま右にあげたものに類した記述を二つあげると、

武帝元狩二年（西紀前一二二年）十二月、雨雪。民多凍死。是歲淮南衡山王謀反發覺。皆自殺。使者行郡國、治党与。坐死者数万人。

とあり、

元帝永光二年（西紀前四二年）三月、隕霜殺桑。九月二日、隕霜殺稼。天下大飢。是時中書令石顯用事專權。与春秋定公時隕霜同応。成帝即位、顯坐作威福誅。

とある。これらはともに自然現象が異常で、民衆が苦しんだことを述べ、ついで（国家権力側から見ての）不正行為が行われたのを述べ、さらに（国家権力側の）それへの処置を述べている。いまとりあげている記事もこうした構成内容をもつもので、まず時ならぬ降雪があつて関東で人々が苦しんだことを述べ、ついで、その歳に民衆のうち緡錢を申告すべきものが申告しないという不正行為が行われたことを述べ、さらにその処置としての告発者への褒賞のことを述べているとすべきである。この申告すべきものがあえて申告しなかったという点は、ここでは不正行為として述べられているが、一般的にいうと、告緡（とくに楊可の告緡）によつて商賈は全く疲弊し、一般民の中家以上は数多く産を破り、また彼らに働く意欲がなくなつていた。そのため申告した緡錢が殆んどなかった。それに対し国家は告緡をすすめたが、それ際の褒賞額は（旧来同様に）緡錢の半額であつた、ということにならう。要するに、元鼎三年の告緡は、それが新らしく設けられたこと、あるいはその制の実行の再確認を物語っているのではないのである。

ところで、如淳の引用した漢律はその不正申告に対する処罰内容から見て楊可の告緡制が行われていたときのも



のでないのは明かである。あるいはこれが楊可の告繒制よりあと（王莽時代を除き）漢一代を通じて行われたものかとも思われるが確かなことはわからない。しかし、何れにしても繒錢制―算繒制は漢一代を通じて存在していたと考えることが可能であろう。なお、『吳志』<sup>卷三</sup>孫皓伝、天璽元年（西紀二七六年）の条の記事を見ると、吳にあって繒錢制―算繒制が残っていたのがわかる。

第二に、王莽の税法における収益税についてであるが、『漢書』食貨志下には、王莽が始建国二年（西紀一〇年）に施行した税法について、

諸取衆物鳥獸魚鼈百虫於山林水沢、及畜牧者、嬪婦桑蚕織紵紡績補縫、工匠医巫卜祝及它方技、商販賈人坐肆列里区謁舍、皆各自占所為於其所之県官、除其本、計其利、<sup>（附）</sup>十一分之、而以其一為貢。敢不自占、自占不以実者、尽没入所采取、而作県官一歳。

とある。これは農業より外にあって収益をあげた場合、それぞれその利益の十分の一を貢とすべきを示している。この利益は繒錢と同質のものであり、そこに見える自占の税法は占租制と同質のものである。なお、自占不実の場合采取したところを没入し県官で一年間作業させるとあるが、この采取したところというのは、利益だけのことも本を含むこともあろう。そうした点ではさきの自占しなかったときの処罰とズレがある。しかし、巨視的には、王莽の税法にも収益税が大きい割合を占めていたとされよう。周知のように、王莽は『周礼』に依拠した政治を行おうとしているが、『周礼』における一般的な財政収入は基本的には収益税と人頭税とからなっている。<sup>（10）</sup>王莽の右の税制はそのうちの（田租を除く）収益税をとりあげたものである。

翻つて考えるに、漢時代（とくに前漢時代）の税法にあっては人頭税が大きい比重を占めていた。<sup>(1)</sup> いままで見てきたところから、そのほかに収益税（田租を含む）も亦大きい比重を占めていたことが察せられる。こうしたことは、その税法が巨視的に『周礼』の示す税法とはば合致すべきを意味する。

ちなみに、武帝のとき、均輸、平準なども行われ、民間側の商業活動は弱まった。武帝よりのち商賈彈圧は緩んだのであろうが、商賈は「上言」ごろまでのような目立った活躍をしなくなった。ところで、武帝によりその活躍の途をせめられた商賈は往々国家の経済官僚となった。一方、大土地所有者であわせて商業活動もするといったタイプのものは、のち大土地所有者としての行動の裏で商行為をするようになったと思われる。例えば、『東觀漢記』<sup>卷十</sup>樊重伝に、樊重について、

世善農稼。貨殖、治家産業。起廬舍、高楼連閣。陂池灌注、竹木成林。閉門成市。家素富。（下略）

としている。これは樊重の自給自足的な経営方針を示したものであるが、そこに門を閉じて市を成す、とあるのは自給自足的なもののなかにあって、しかも（城内の市とは関係なく）事実上市のように有無相通ずる経営をなしたのを物語っているとすべきである。こうした際、恐らく脱税により正規の緡銭は占租されなかったであろう。なお、こうした豪強の市経営の形態は六朝に入っても見られる。例えば、『抱朴子』外篇吳失卷三十四に、吳の滅亡の直前の大土地所有者について、

（前略）僮僕成軍、閉門為市。牛羊掩原隰、田地布千里、有漁滄濯裘之儉。以竊趙宣平沖之名、内崇陶侃文信之誓、実有安昌董鄧之汙。

とある。こうしたことは右の一証となろう。<sup>(12)</sup>

#### 四 市籍と商人

(B)と(C)とから、買人が市籍に付けられた坐商なるべきこと、及び商が必ずしも市籍に付けられていないことが察せられる。買が坐商であり、商が行商であることについては、『周礼』司徒教官之職司市の鄭玄の注にも

通物曰商、居売物曰買。

とある。

買人が市籍に付けられていたことは、他の史料にも見える。例えば、『漢書』<sup>卷四十九</sup>晁錯伝に晁錯の「上言」をのせているが、そのなかに、

臣聞、秦時北攻胡貉、築塞河上、南攻楊粵、置戍卒焉。……秦之戍卒不能其水土、戍者死于辺、輸者餓于道。

秦民見行、如往棄市。因以謫戍之、名曰謫戍。先發吏有謫及贅婿・買人、後以嘗有市籍者、又後以大父母・父母嘗有市籍者、復入閭、取其左。

とある。ここに見える秦の謫戍は、<sup>(13)</sup>皇帝のときに開始されたが、その際買人について、先ず買人、そのあとに於て市籍をもっていたもの、さらにそのあとに大父母、父母がかって市籍をもっていたものの順で謫戍にとられたことが示されている。そうすると、この買人は現に市籍にあるもの本人ということになる。さて、『漢書』<sup>卷六</sup>武帝紀、天漢四年（西紀前九七年）正月の条の「発七科謫」の顔師古の注に、

漢時代の繆錢をめぐって 越智

張晏曰、吏有罪一、亡命二、贅壻三、買人四、故有市籍五、父母有市籍六、大父母有市籍七。凡七科也。

とある。この「故」は「父母有市籍六」、「大父母有市籍七」の何れにもかかるとすべきであろう。さきのものであれとでは若干出入があり、また前者とちがい後者では讎成徴発の先後がなされていないが、その買人が市籍あるものであるのを察せしめるという点では同様である。(ただし、買には広くあきないを意味する用法もある。)

つぎに市籍をもつことに對しかかる税についてであるが、『漢書』<sup>卷八</sup>何武伝に、宣帝のときのこととして、

武兄第五人皆為郡吏。郡縣敬憚之。武弟顯家有市籍。租常不入。縣數負其課。市嗇夫求商捕辱顯家。顯怒、欲以吏事中商。武曰、以吾家租賦繇役不為衆先奉公。吏不亦宜乎。卒白太守、召商為卒吏。州里聞之皆服焉。

とある。――(傍線)の部分「有市籍租。常不入。」と読んで市籍租の存在を想定した向もあつたが、この租はそ

の後文とあわせ見た際、むしろ(より広い)租賦を意味し、そのなかに市籍に對する租があつたとする方が穩当であろう。なお、さきの家は顯を家長とする家であり、あとの家は(長兄)武を家長とする家である。前者は後者に含まれる。右は市籍への租税は直接的には顯の家にかかるが、最終的には武の家の責任となるのを示唆している。<sup>(14)</sup>

ところで、商業を営むにしても、それを專業とする商賈のほかに、一般農民で兼業として商業を営むもの、大土地所有者で兼業として商業を営むもの(、没落農民で小規模の商業を営むもの)もいる。(B)の商はそうしたものを含んでいるのであろう。そうしたものがさきの專業者と同様に商業を営むといった様態を察せしめるものとしては、前引のように、「平準書」に楊可の告緡の制が天下に遍く行われたときのこととして、

楊可告緡偏天下。中家以上、大抵皆遇告。……於是商賈中家以上、大率破。民偷甘食好衣、不事畜藏之產業。

とあるのに窺われる。つまり、前者の中家以上は後者の中家以上を指すが、そこには商賈より外の中家以上のものゝ殆んどが告緡の対象となつたことが示されている。この中家以上の殆んどが告緡の対象となつたということは、中家以上が通常農桑より外の営利活動をしていたのを裏から察せしめよう。そこには当然商業活動が大きく含まれているとされよう。なお、『塩鉄論』擊之第四十二に、

文学曰、異時県官修輕賦、公用饒、人富給。其後保胡越、通四夷、費用不足。於是興利官、算車舡、以警助辺。贖罪告緡、与人以患矣。

とある。車舡に算するというのは(D)に該当するものである。右の告緡は特定の商賈、工人を対象とするものではなく、それを含む一般民衆を対象とするものと考え<sup>(15)</sup>るべきである。こうしたことも亦さきの告緡の対象に関する理解をささえるであろう。

さて、『管子』大匡第十八に、

凡仕者近宮。不仕与耕者近門。工賈近市。

とある。『管子探源』によると大匡は戦国時代の人の作とされているが、右では工と賈とが市の内に住んでいなかったことになる。この賈は商を含むとされよう。元来城内に農民は住んでいなかったが、のち城内に住むようになった。<sup>(16)</sup>右はその段階のものであろう。またそこでは工商賈は城内で市の近くに住んでいたと見るべきであろう。ところで、『雲夢竹簡』の秦律金布律に、

賈市居列者官府之吏、毋敢挾行錢布。挾行章布者、列伍長弗告、吏循之不謹、皆有罪。

とある。<sup>(17)</sup>これと『太平御覽』<sup>卷八百</sup>資産部七市に、

三輔黃圖曰、……又為方市。闐門。周環列肆、商賈居之。都商亭在其外。

とあるのをあわせ考えると、秦漢の市に商賈が住んでいたことが察せられるであろう。「上言」の(B)に、

諸賈人未作、賁貸売買居邑稽諸物

とあるが、かくてこの邑は市という邑のこととなろう。

ちなみに、『洛陽伽藍記』<sup>四卷</sup>に、後世のものであるが、

出西陽門外四里、有洛陽大市。周廻八里。……市東有通商達貨二里。里内之人、尽皆工巧屠販為生、資財巨

万。……市南有調音樂律二里。里内之人、糸竹謳歌、天下妙伎出焉。……市西有延酤治觴二里。里内之人、多

醞酒為業。……市北(有)慈孝奉終二里、里内之人、以壳棺槨為業、賃<sup>賃</sup>為事。……別有阜財金肆二里。富人

在焉。凡此十里、多諸工商貨殖之民。千金比屋、層樓對出、重門啓扇、閣道交通、迭相臨望。(下略)

とある。通商達貨二里の内には、劉宝という富家がいて大邸宅をかまえていた。彼は州郡都會には皆一宅を設け、全国いたるところで商販している。ここに見える通商等の十里については、洛陽大市の周囲の八里と別の二里との合計(この里は距離を示す)と理解され、さらに漢時代にあっても主たる營業を市においてする商工業者が市周辺の諸里に多数居住していたと考えることの一証とされているようであるが、右は洛陽の外四里の距離にある、周廻八里の洛陽大市内の東部、南部、西部などにある十里の様態を示しているものとすべきである。そこには工人や商賈がいたとされよう。また、『初学記』<sup>十四卷</sup>居処部市第十五に、晋成伯陽樂市賦をのせ、そのなかに、

惟市之由興、自帝炎之所創。……爾乃巷列千所、羅居百族、街衢相望、連棟按屋。

とある。これも市中に人々の住んでいたのを物語っているとされよう。(この百族はのち『周礼』で見る百族とは違い、現象的に商賈、工の類を指しているとすべきであろう。)また、『文選』蜀都賦、左太冲に、成都城の西の小城のなかにある市について、

闐闐の裏、伎巧の家、百室離房あり。機杼相和し貝錦斐成りて、色を江波に濯ぎ、黄潤簡を比べて鱗金をも過ぐる所なり。

とある。闐は市の巷、闐は市の外門である。これは市内に蜀錦を生産する工人の家があるのを述べている。

ところで、『周礼』司徒教官之職司市に、

大市日昃而市、百族為主。朝市朝時而市。商賈為主。夕市夕時而市。販夫販婦為主。

とある。この鄭玄の注に、

日昃、昃中也。市、雜聚之处。言主者、謂其多者也。百族必容イルナリ来去。商賈家於市城。販夫販婦、朝賁夕売。

因其便、而分為三時之市。所以了物極衆。鄭司農云、百族、百姓也。

とあり、その賈公彦の疏のなかに、

云市、雜聚之处。言主者、謂其多者也者、謂言百族為主、則兼有商賈販夫販婦。云商賈為主、則兼有百族販夫販婦。云販夫販婦為主、則兼有百族与商賈也。云百族必容来去者、百族或在城内或在城外者、容其来往、故於日昃以後、主之。云商賈家於市城者、行曰商、居曰賈、即賈家於市。今并言者、其商雖行通物、亦容於市也。

## (下略)

とある。この疏は、市城を市と同じものと読み、鄭玄が商賈が市に家していると述べている、としている。また、『正義』にも、「云商賈家於市城者、大宰注云、行曰商、処曰賈。以賈居於肆、商雖行亦有邸舍在城市、不須逐日來去也。」とある。蓋し鄭玄は商賈はすべて市ににいるとしているのであろう。司市の廛市、朝市、夕市の解釈としては、鄭玄の示したようなものしか考えられないが、そこでは自ら商賈は市に住居をもつことになる。こうした鄭玄の理解は必らずや当時の実情をふまえたものであろう。なお、『三輔黃圖』<sup>二</sup>卷長安市に、

廟記云、長安市有九。各方二百六十六步。六市在道西。三市在道東。凡四里為一市。致九州之人。(下略)

とある。これは長安の九市にそれぞれ里があったのを示している。他の大小の城の市にもそれぞれ里があったことであろう。長安の商賈が市に住むとすればこうした里にいたことであろう。なお、『文選』西京賦、張平子には、漢の長安の九市で、百族、小商売の夫婦も亦商行為をしていたことが述べられている。

このように見てくると、かつて市に商工は住んでおらず、恐らくはそれだけに市は小規模であったが、のちその規模が大きくなり商工もそこに住むようになった。(漢の長安ではそうした市は城外におかれたが、それは長安城の機能の一部をなす。さきの蜀都と市のある小城との関係についても同様のことがいえる。)ということになる。ただし、商は農村に赴いて商売をすることもあった。

この際改めて注目すべきは、『周礼』鄭玄の注に、ともに大市、朝市、夕市何れも主と副との別はあっても、そこで商業活動をするものに百族、商賈、販夫販婦がすべて含まれているとしていることである。この際の百族には



当然大土地所有者や一部農家も入るであろう。また販夫販婦は、没落農民の小規模の商業従事者とされよう。<sup>(19)</sup>ところで、「司市」には、また、

凡市偽飾之禁。在民者十有二。在商者十有二。在買者十有二。在工者十有二。

とある。この民はさきの百族、販夫販婦を指すのであろう。これは市にあって商業活動をするものに、民と商と買との外に自らの製品を売る工がいたのを示している。こうしたことは必らずや漢時代の大勢でもあったであろう。(市には、買が自己の店舗で営業する場合以外にも何らかの形で営業を可能とする設備があったのであろう。)

ちなみに、『漢書』<sup>卷六十六</sup>楊惲伝に、宣帝のときのこととして、

(前略) 惲既失爵位、家居治產業。起室宅、以財自娛。

とあり、友人が惲の治産をいさめたのに對する答のなかに、

竊自思念、過已大矣。行已虧矣。長為農夫、以没世矣。是故身率妻子、戮力、耕桑灌園、治産、以給公上。不意、当復用此為議也。……惲幸有余祿。方糴賤販賣、逐什一之利。此賈豎之事、汙辱之处。惲親行之。下流之人。衆毀所歸。不寒而栗。(下略)

とある。「給公上」は、顔師古の注に「師古曰、充臬官之賦斂也。」とあるが、そのように読むべきであろう。これは官人が免官されてのち、家に居て農桑につとめると同時に商業に従事し、かつ商業活動によって世間にそしられたのを示している。これはやや特殊例といえようが、それにしても一般論的に、農業生産に従事するものが同時に商業にも携わりえたのを察せしめるところがあろう。なお、楊惲は市に住んでいたのではなからう。

さて、「平準書」に、元封元年（西紀前一一〇年）のこととして、

令民能入粟甘泉、各有差、以復終身、不告繒。

とある。この「告繒」は意味が通じないから、平中氏のいわれるように占繒の誤りとすべきである。<sup>(20)</sup> この繒銭を占する民には富農も含まれていることであろうが、それらが占繒を免ぜられるとすれば、彼らは専ら田桑に従事するのでなくそれより外の事にも従事したことになる。

また、『居延漢簡』に、

二月癸酉、河南都尉忠、下郡太守諸候相、<sup>(21)</sup>承書從事、下当用者。実、字子功。年五十六、大状黑色臬須。建昭

二年（西紀前三七年）八月

庚辰、亡、過客居長安發利里者雒陽上商里范義。壬午、実買所乘車馬、更無駢牝馬白蜀車縹布併塗載布。

とある。<sup>(22)</sup> これは山田勝芳氏のいわれるように、<sup>(23)</sup> 実が亡命し、長安に客居している雒陽の范義のところに過り、義から車馬を買ったが、そのことについていっているのであろう。この發利里、上商里は何れも市内の里であろう。

ところで、漢時代の商人、市籍については近年いくつもの研究が発表されている。まず市籍についてであるが、主として山田勝芳氏のまとめられたところによると、<sup>(24)</sup> 市籍についての通説的見解は、市内に店舗を設けて営業する商人の名稱あるいは營業登録簿であり、市籍をもつものは商人である、ということになる。ところで、影山剛氏は「市肆に店舗を並べて営業する商品販売者はすべて市籍とよばれる良民とは異った戸籍簿に登録される規定」であり、良民の居住区である里と市とが区別されていたとしておられる。<sup>(25)</sup>

以上のような諸見解に対し美川修一<sup>(26)</sup>氏は、市籍は市に居住する商人・工・医・卜相・巫・方技及び游俠・亡命・流民などを登録するものである。それ故この市籍に登録される市人が有市籍者であり、市籍と商業とを切り離して考えるべきである。市人は何れも戸籍離脱者であり姦人であったが、そうした彼らは仕官もできず田も持てなかった。こうした市人が謫戍の対象とならないのは、兵法において烏合の衆である市人を戦わせることが危険視されていたからであり、また過去の有市籍者等が謫戍されるのは現在里居の庶民であっても過去に戸籍離脱の罪を犯したからであった。このような漢初の市籍は武帝の元狩四年に新しい性格をもつに至った。算緡は、本来現銭しかもたない市人に対する課税であるが、この時点の算緡は、市籍の有無にかかわらず全商工業者を対象とする営業許可税として新設された。このように営業そのものが課税の対象となったとき、すべての商人が市籍に登録されたが、それは市人を登録する市籍とは異なる。(里居の商人は里の戸籍に登録されていたので、彼らの身分に変更はなかった)かくて市籍は旧来の市人登録簿という意味と、営業登録簿という二重の意味をもつに至った。前漢時代営業利益に対する課税はなく、漢初以来入市税たる市租が存在したが、武帝時代算緡として営業(許可)税が新設され、それが市籍租とよばれた、としておられる。

ところで、山田氏は営業登録簿たる市籍に戸籍を記されず「市居住」と記された商人こそが有市籍者である。この際本来戸籍を有する商・工を営む者が移動を行った結果、戸籍を失って「市居住」とされることが重要である。有市籍者Ⅱ「市居住」以外の商人は、晁錯の言に従えば、少くとも納粟授爵によって爵位を得ることができたと解して何ら問題はない、としておられる。山田氏はそうした有市籍者が賤視されたが、その根本的な理由は、人々の

異邦人「客」に対する蔑視と、彼らを排除しようとする感情に求められる。なお、「市居住」の商人は社会的に低い地位にあつたが決して賤民でない。彼らの中の成功者はやがて市外の里に邸宅をかまえ大規模な商業を行い、土地を購求してその地位を上昇させたであろう。また、小規模であっても市外に居を移していった者はもつと多かつたに違いない。しかし古代国家はこうしたものをとも譴戍・仕官制限の対象とする。それは一部の民衆の感情を代弁しつつも、より多くは国家の民衆支配のイデオロギーとして強権を発動したものであらう、としておられる。

つぎに、いままで見てきたところを踏えた私見を簡単に述べると次のようになる。市籍は史料的に市内に住居をもつて營業する商人あきんどの籍である。ところで、何頭は市籍をもつていても市内に住んでいたようには思われない。その点を考えると、市籍は商人として市の内外で營業活動をすることを認めた名籍で、市に住むことを原則としたが、例外的とはいへそこに住居をもたぬものもいた、とされよう。市籍をこのように解する私見は、部分的には（山田氏のいわれる）通説的なものに属するのかも知れない。また、美川氏の見解に対し、山田氏は武帝の元狩四年以前においても市で營業するものが市籍に登録されていたこと、及び市籍・有市籍者と亡命・姦人とは切り離して考えるべきことを説かれ、また美川氏が七科の譴の際、現在の全商人（賈人）はその対象となるが、現在の有市籍者（市人）市人はその対象とならず、その理由は兵法上彼らを戦わせることが忌まれていたとする点については、その賈人を現在の有市籍と解する通説の方をとるべきを説いておられる。また、影山剛氏は流民、亡命の徒がわざわざ官憲の常駐する都市の一画に集つてくること、やがて登録が制度化されるほどの常態であつたとは考えがたいことではなからうか。一旦市が商業地区として成立すれば、特別の理由をもつ少数者の身を匿す恰好の場として利用さ

れるようになることは、当時の幾つかの事例が示すように当然のことである。美川氏が指摘する特殊な事態は、元来は市場として設定された市に必然的に生れた二次的性格に他ならないし、それから市人・市籍の法制的性格を導き出すのには問題があるのではなからうか、としておられる。<sup>(27)</sup> 筆者は（その有市籍を後述のように考えた上で）基本的に山田、影山両氏の批判をとるべきであると考ええる。また、算籍はすでに述べたように、市籍をもたないものをも対象とするが、営業に基く利益にかける税であって終始営業許可税ではない。また、市籍租という税目はなく、それを示す史料『漢書』何武伝の記述）は、市籍をもつものにかける税が租とよばれたことを示していると考える。また、市租は算籍のことと考える。（さきにもふれたが、前漢時代の買人の私田所有は、少くとも末期の綏和二年（西紀前七年）まで禁止されたことはなく、<sup>(28)</sup>は実行されなかったと考える。そこでは当然商の私田所有禁止はなかったであらう。）

つぎに山田氏の見解についてであるが、筆者は有市籍者という名詞はなく、それは「市籍有る者」として見るべきであると考ええる。つまり、いわゆる市籍と有市籍者の市籍とは同一のものであり、市籍につけられたものと有市籍者とを区別するところにたつ見解はその限りにおいて成立しがたいように思われる。

## むすび

本稿は筆者の漢代経済史研究の一部をなすものであるが、本稿で述べた要点は次の通りである。

（一）繒銭は商業活動（高利貸しを含む）や工業生産においてえた利益（銭で示したもの）を意味するが、その利益の申告を占租という。その利益に対しては一定の率で税がかけられた。その税の単位を算という。

(二)『漢書』の元鼎三年の告繒の記事は、自然界の変異と人間社会の変事とを結びつけたもので、告繒制の新設やその実行の再確認に関するものではない。

(三)漢時代の税の基本をなすのは収益税と人頭税とであると考えられるが、巨視的にとりあげた際、前者の中心となるのは、算繒錢と田租とである。

(四)王莽のときにも利益を自占させ、その $\frac{1}{10}$ を貢(という名の税)としてとった。自占しなかったり自占しても正確でないものに対しては、そのえたところのものを没収した。

(五)市籍は市に住む専業の商人(坐商、行商)として営業を認めたものの籍である。

(六)市に住居をもつものは、坐商である賈と行商である商と工人との三者である。しかし、市で商業活動をするものには、その外に商業を兼業とする大土地所有者と一部農民とがある。後者には没落した農民で小規模の商業活動をしているものなども含まれていたと考えられる。なお、商は市で商売するだけでなく、各地(農村を含む)に赴いて商売をした。

# 註

(1) 平中岑次氏、『中国古代の田制と税法』第九章「漢の武帝の算繒錢」(以下、「平中氏論文」という)に見える分類

による。なお、本稿は右の論文に種々益を受けた。また、影山剛氏(『漢の武帝』)も財産税説をとっておられる。

(2) この点は、別稿、「漢時代の商賈について」(未発表)

で述べる予定。

(3) 吉田虎雄氏、『両漢租税の研究』参照。

(4) 前掲、「平中氏論文」参照。

なお、占租の占が申告を意味することについても右論文参照。

(5) 拙稿、「前漢時代の徭役について」(『法制史研究』二

五 参照。

(6) 前掲、『中国古代の田制と税法』第七章「漢代の營業と「占租」」参照。

(7) 市租(つまり算繒)については、前掲、『漢時代の商賈について』参照。

(8)・(9) 前掲、『平中氏論文』参照。

(10) 拙稿、『周礼の財政制度・田制・役制をめぐって』(『九州大学東洋史論集』9)参照。

(11) 拙稿、『漢時代の算賦をめぐって』(『三上次男博士頌寿記念論集』)参照。

(12) 「閉門成市」については、宮崎市定氏、「部曲から佃戸へ」(『アジア史論考』中巻・古代中世編)参照。

(13) 渡辺武氏、『秦漢時代の讎戍と讎民について』(『東洋史研究』三六—四)参照。

なお、七科讎、漢時代の財産税についての私見は前掲「漢時代の商賈について」で述べる。

(14) こうした二重の家の構成についてはすでにとりあげたが、後日もう一度論ずる。

(15) 『史記』<sup>卷一百張湯伝に、</sup>二十張湯伝に、(前略)籠天下塩鉄、排富商大賈、出告繒令、鉅豪彊并兼之家。

とあるのは、告繒ひいては算繒銭が商賈より外の豪強をも

漢時代の繒銭をめぐって 越智

対象としたことを示している。

(16) 拙稿、『戦国時代の聚落』(『史淵』一〇三)参照。

(17) この「賈市居列者」は竹簡の注釈に見えるように、市肆中の商賈のことであろう。

(18) 拙稿、『漢の長安城について』(『古代文化』二八—一)参照。後日右稿は改訂する。

(19) 『周礼』は自立して生活のできないものの存在を認めている(『周礼の財政制度・田制・役制をめぐって』)。蓋しそれに近い性格のものとして販夫販婦が考えられているのであろう。

(20) 前掲、『平中氏論文』参照。

(21) 米田賢次郎氏、「帳簿より見たる漢代の官僚組織について」(『東洋史研究』一四—一・二)参照。

(22) 山田勝芳氏、『中国古代の商人と市籍』(『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』)参照。

(23) 前掲、『中国古代の商人と市籍』参照。旧来の諸研究も同論文に示されている。

(24) 影山剛氏、『中国古代帝国における手工業・商業と身分および階級関係』(『歴史学研究』三二八)参照。

同氏は最近、『中国古代における都市と商工業』(『歴史学研究』四七一)を発表しておられるが、示唆に富むものである。

(25) 美川修一氏、「漢代の市籍」、『古代学』一五—三 参照。

(26)・(27) 前掲、「中国古代の商人と市籍」参照。

〔追記〕

漢初、国家の財政はすべて天子の私財政であり、いわゆる国家財政と帝室財政との区別はなかった。そこでは商工利益にかける税は、そのなかの天子の私用財政に入っていた。のち国家財政と帝室財政との区別ができ、天子の私用財政は帝室財政となった。しかし、「上言」のときそれは（算繒として）国家財政に入っている。こうしたことは、組織としての国家権力の強化の一環をなす（拙稿、「前漢の財政をめぐって」『九州大学東洋史論集』10）。